口マンス至上主義

Sae Otsuka 4th LIVE

2025.10.10 SAE OTSUKA 4th LIVE
SPECIAL PAMPHLET

2025.10.10 SAE OTSUKA
4th LIVE

ロマンス至上主義…
それはやがて来る「ロマンス革命」へと至る思想の源流。

大塚紗英4th LIVE「ロマンス至上主義」のテーマは「ロマンス革命」。
その革命を起こすための意思表示としての4th LIVE。
大塚紗英の思う「ロマンス」とは、自分の生きる意味、魂の研鑽。
色鮮やかに生きることだと思っていた「ロマンス」は、
苦しいことを美しいと思うことだと気がついた。

昨今の音楽業界を取り巻く状況、
つまり巨大レーベルやTiktokなどの巨大資本に対する反旗を翻したい、
運やお金といった資本に対して、「ロマンス」という言葉で立ち向かう
革命の物語。

— 歴史をつくるのはただひとりの英雄でも将軍でもない、
われら人民だ われらは祖国の名もなき英雄になろう!!

— オスカル・フランソワ・ド・ジャルジェ

（池田理代子『ベルサイユのばら』）

今回のライブテーマはそんな大塚紗英の
「ロマンスで世界に革命を起こしたい」という
思想を提示するライブ。

ROMANCE SUPREMACY

The theme of the live event is "Romance Revolution." Romance is the meaning of her life.
She'll stand up against the current music industry and the huge capital with romance.
"Spark a Romance Revolution in the world with me!"



「ロマンス至上主義」スペシャルインタビュー

Special Interview

Sae Otsuka

大塚紗英

2022年、フリーランスになることを発表した大塚。
そして10月には自身のレーベルとなる「Great Romance Records」を発足。
そこから本日10月10日に至るまでの3年間、自身が中心となって、さまざまな活動を行ってきた。
そんな大塚のアーティストとしての葛藤、悩み、喜びを16,000文字に及ぶ
超ロングインタビューで語り尽くした。

――2022年にインディーズレーベル「Great Romance Records」を発足され、来月11月で丸3年になります。今回のライブ「ロマンス至上主義」について触れる前に、まずこの3年間の活動の歩みや、そこで気づかれたことなどをお聞かせいただけますでしょうか。

言葉にしがたいほど密度があったように思うのですが、振り返ると本当に手探りで歩み続けた3年間だったと感じています。

――活動を開始された2022年当初は、手弁当と言ったら失礼かもしれませんが、ご自身でライブを主催されたり、グッズ制作など様々なことに取り組まれていた印象があります。

はい、まさに手弁当でした(笑)正直なところ、本当に9割5分は一人でやっていました。頼れる人ももちろんいませんでしたし、何と言うか、そもそも頼り方がとにかく分からなかったです。「頼る」と言葉にすると、誰かに寄りかかったり甘えたりというニュアンスになりますが、それにすら至らず、まず実務的な部分をお願いできる会社や、そのツテといったものも全くありませんでした(笑)まさに暗中模索な状態ではあったのですが、何もないところからのゼロスタートだったので、走り出しの期間というのはすごく楽しくて。何事もそうかもしれませんけれど、始める時というのはすごく楽しいもので、最初の頃の方は大変でもあり楽しかったなと感じています。

――確か「吸いがら」をリリースされたのが2022年でしたよね?

はい。2022年の11月です。

――ということは、時系列でいくと1st LIVE「ロマンスのはじまり」がフリーランスとしての活動の一番最初にものになるのでしょうか。

そうですね。フリーになると発表したのが2022年の7月1日。そこから初めて皆様に「大塚紗英です」という形で名乗って正式にパフォーマンスをしたのが10月9日、10月10日のライブでした。

――改めて、とても驚きですね(笑)このライブは私も拝見させていただきました。2 Daysでの開催、かなり大変だったのではないでしょうか。

自分でも前代未聞だと思います(笑)先ほどもお話させていただきましたが、本当に全て一人でやらなければいけなくて。もう何も覚えていないくらい、必死でした。でも確かに、私くらいのキャリアや、フリー歴もゼロの右も左も分からないタイミングで、「横浜ベイホール」というとても大きい会場を抑え、人を集めてライブをする!というやり方は、我ながら斬新だったなとは思っています(笑)

――フリーになって3ヶ月でこの規模のライブというのは前代未聞だなと。

そもそも最初はフリーになる気はなかったんですよ。でもとにかく環境を変えないと、このままじゃうまくいかないだろうなとは思っていました。その気持ちは5、6年持っていたのですが、とはいえ、まずは与えられた中で頑張る!ということをやってみました。しかしながら、やりきって先が全くなくなったなと思った時に、しょうがないから一旦全部やり直すしかなかったって感じです(笑)だからフリーになろうとか、しがらみから逃れて好き勝手やろうという感じではなくて。

――実際に独立するということやこのライブの開催はいつ頃考え始めたのでしょうか。

具体的に考え始めたのは独立するタイミングのちょうど1年前くらいです。2021年に「スター街道」というミニアルバムを出したんですが、そのリリースのタイミングで、「このままじゃまずい」という気持ちがめっちゃありました。それでリリースの7月から2021年の自分の誕生日の10月過ぎくらいまでどうにかできないかなと頑張って。このような言い方をするのは申し訳ないなと思いつつ、当時は結果としてどうにもならなくて。それで「じゃあもう、環境めっちゃ変えるか!」と決意したのは2021年末。そこからライブやリリース、体制を変えてやっていこうと全部決めきったのは4月だったかな。なので公表したのは7月でしたが、4月から7月までの3ヶ月間、水面下でかなり準備していましたね。

知らなくてもいいことを知るけど、それは悟られたくないな、と

――このライブはご自身で主催されたものだったのでしょうか。

はい。当たり前ですが、費用は全て持ち出しでした(笑)自分の貯金を切り崩してライブをするんですが、その売り上げが振り込まれなかったんですよ、最初。でも関わってくださっている皆さんにお支払いをしなければいけない。数百万円が手元にない状態で支払いがあるという時に、本当にもう口座が止まるかも! となった時がありました。その時はその金額の単位に慣れてなかったから結構怖かったです(笑)

――私もライブを見させていただきましたが、ご自身での主催というのは気がつきませんでした。見ている人は裏の努力だったり、誰がお金を出しているんだみたいなことってあまり分からないものですね。

それならよかったです! フリーになると、知らなくてもよかったことといっぱい知って、すごく人間





的に成長できるのですが、一方、やはりそういう裏というか、お客さんに伝わらなくていいことまで、ついにじみ出てしまうことがかなり心配でした、未熟なので(笑)とはいえ余裕はすごくなかったので、実際気がついていた人もいるかもしません。

ただその苦労は、ステージに立った時のパフォーマンスに対するなんの言い訳にもならない。みんなライブを観に来ているのに、そういうところで時間を取られて、自分のやるべきことがちゃんとやりきれてなかったらすごく嫌だなと思って。実際時間もすごく足りなかったので、そういった懸念がステージに出ていないといいなとすごく不安でしたね。

——そう考えると、やはりメジャーでやるということと、インディーズでやるということは大きく違いますね。メジャーは関わる人が多いというか。

そうですね。

——その分、アーティスト自身の意思決定権が少なくなっていくというか。プロデューサー、A&R、宣伝、販促など、セクションごとの意思もたくさんあると思うので。しかしながら、インディーズは本当に1人。インディーズという言葉は難しいですが、インディペンデント(独立・自治)という言葉が相応しいかもしれませんね。それぞれにはそれぞれの良し悪しがあるなぁと感じます。

そうですね。でもそれはちゃんと優れたメジャーにいる人の意見だなと思います。メジャーといえど、やはり色々な環境や状況で活動されている方がいると思いますし。現代においては、メジャーであっても潤沢な資金や人材がいないところも多いからこそ、あり方がすごく難しいなぁと感じます。アーティストがメジャーに行きたいと思うのには、やはり「自分をどうにかしてほしい」みたいな気持ちがあるじゃないですか。私の場合は、歌や制作よりも先のこと、つまりどういうパッケージにして、どんなふうに、どんな人に届けるかというのをさぞかし考え、用意し、出してくるものだろうと思っていたんですけど、少し違いました(笑)

実際、メジャーでは自分にはお金などもほぼ入ってこない、だけど夢のためにみんな音楽をやっているという。私だけではなく、現代の音楽業界のあり方として、多分そういうことになっているんだと思うんです。そのような環境の中で、アーティストが思うような理想通りのメジャーって今はほぼないんじゃないかなと思っています。確かにインディーズはインディーズで難しいなと日々感じていますが、アーティストでありつづけることを考えた時に、これは一つの良い形なんじゃないかなと思ってます。

チームを作る難しさを感じました

——なるほど、やはり良し悪しですね。少し話が脱線してしまいましたが、そんな10月のライブを経て、「吸いがら」「ロマンスは映画より奇なり」「ロマンスのはじまり」と3作リリースしていくわけですが、リリースをするにあたって、音楽・映像共に、どのようにチームを編成したのでしょうか?

恥ずかしながら、最初は本当に右も左も分からない状態だったので、音源を作るということに一切思いが至っていなかったんです。そもそもフリーになるにあたって、何をしたらいいんだろう…という状態でした。なので知っている人にいっぱい話を聞きまくっていたんです。その中で、たまたまご縁で知り合ったサウンドプロデューサーの方がいて。ちょうどその時、音源はないのにミュージックビデオを撮ろうとしていたんです。「いや、だったらピアノ弾き語りじゃなくてちゃんとした形で音源出そうよ」みたいな。

——音楽ではなく、映像が先だったんだんですね、驚きです(笑)

そうなんです。とはいえ、実は当初メジャーレーベルからもお声がけを頂いていたので、この3曲を作り、そこからショットで出したらいいんじゃないかという提案を頂いての始まりでした。その時は渡りに船だったので、せっかく頂いた話だし、まず3曲やってみようという感じで。

——なるほど。また少し話が逸れてしまいますが、「吸いがら」をリリースした際にはオンラインサイン会をやられてましたね。

懐かしい(笑)

——コロナ禍で広がったオンラインサイン会ですが、振り返ってみていかがでしたか。

すごくいい催しだったと思います。ライブに来れない方とかも沢山いらっしゃって。「会場には行けないけどCDは欲しい」と言って、CDを買っていただけたのはとても嬉しかったです。それに加えて、オンラインでしかできないコミュニケーションもあったのが新鮮でしたね。フリーになって、お一人お一人の力によって自分のアーティスト生命が繋がれていると強く実感したんです。そういう意味でもオンラインサイン会をやると、誰がどういう熱量を持って接してくれているかというのが見えて、とてもよかったです。

——オンラインサイン会って特殊でしたよね。物販をしてCDを買ってくれたらお渡し会みたいなリリースイベントはありますが、よくよく考えてみると、その方のお名前やサインを書くという行為が実はこの世ってそんなにないですね。

確かに。

——サイン入り色紙プレゼント、みたいなものに名前は載りませんし。お渡し会の時にも名前を書くことがそんなにあるわけじゃない。と考えた時に、こうやって人の名前を手で書いて認識するというのは1つ、「応援してくれる人がいるんだ」ということへの実感と感謝を身に染みて感じられるんでしょうね。インタラクティブに見えないようで心はインタラクティブという。

確かにその通りですね!

「メジャーじゃできないことをやろう!」が目標でしたね

——そんなオンラインサイン会で2022年に幕を閉じます。そして2023年初頭の大きなトピックとしては、LAでの「ロマンスのはじまり」のMV撮影がありました。これはどうしてLAで撮影をしたのでしょうか。

うわー、懐かしい。とにかく絶対フリーじゃなきゃできないことをやりたいということがまず強くあったんですよね。本当、初期衝動だったんだと思います(笑)やれることに限りはありつつも、人に面白いなと思ってもらえる作品を作りたいなと考えた時に、海外っていうのを思いついたんですよね。メジャーで海外に行ってMVを撮るのって、やはり相当勢いがあるチームじゃないと難しい。だからこそフリーでパッと行って、パッと撮れちゃうみたいなところは自分たちの強みではないかなと思いました。「こういう面白いチームがいるんだ」というのを、業界の人に向けて知っていただきたかったというPR的側面もありましたね。

——こんなイかれたこと、本当にメジャーじゃできないですね(笑)

やはり普通だったらできないことをやりたかったのは大きかったですね。あと、その頃から大事にしているテーマとして、映画みたいな映像を作ることがありました。映画みたいなミュージックビデオ、ミュージックビデオみたいな映画というショートフィルムっぽいスタンスでやっていくというのを結構大事にしていました。そういうところからも、「映画の街」といえばハリウッドだなぁと。自分たちが夢に憧れていた ハリウッドに行って、映画を作り、広げていくというスタートの街としてすごくいいなと思い、行ってきました。

「自分ってどういうアーティストなんだろう?」ということに向き合いました

——なるほど。確かに映画をテーマにしているというのは、1ヶ月後に開催されたLIVE「ロマンスは映画より奇なり」にも見て取れました。SHIBUYA PLEASURE PLEASUREは劇場型のホールでした。

そうですね、特に走り出しの時は映画というものが、楽曲制作、映像制作共にテーマになっていました。思い出してきたんですけど、映画というところに加え、ワールドワイドでありたいことを

かなり意識していました。最初に出した「吸いがら」がなぜかイタリアでちょっとバズって。イタリアの日本人ミュージックチャートで1位をとったんですよ。今ってインターネット上で世界中の皆さんに聞いてもらえるチャンスがあるので、あまり日本というものに囚われたくないなと思って。それもあって、視野を広げたかったのでアメリカに行ったというのはありました。

話はライブに戻って、1st LIVE「ロマンスのはじまり」では、とにかく「ここから始めるんだ、そしてここから広げていくんだよ」という決意表明をお客さんに伝えなければいけないというところがありました。そして、これまでの原盤（音源）が一切使えなくなってしまったので、とにかく全曲新曲でライブをするというところが全てでした。

良くも悪くも「ロマンスのはじまり」では、ライブをすることが全てになってしまっていたんです。だからこそ、2nd LIVE「ロマンスは映画より奇なり」の時はちゃんとコンセプト立てをして、この人はライブ以外の部分でこういうことがしたいんだな、こういう人柄なんだな、というのを伝えていくようなライブをしようと思いました。

この辺から、自分自身の長所ってなんだろうってすごく考えるようになったんです。そして一生懸命考えた結果、自分が持っている人生観とか哲学みたいなところに共鳴してもらうことが、私の音楽の輪を広げる重要な要素だと気づいて。それで生き方というか、生き様を提示していくというコンセプトにしたいと思うようになりました。

――この時のライブは収録もして、製品にもなっていますが、いい意味で製品だけど、製品じゃない粗さがありますよね。YouTubeのコメント欄を拝見すると、すごく感情に訴えられかけたということを書いている方が多いですね。

そうですね、そう思っていただけたのであれば、ライブは大成功でした！

シンガーソングライターとしての修行の1年でした。

――そして2023年3月に1st miniEP「ロマンスのはじまり」をリリースし、4月から「修行ツアー！」を開催されました。

懐かしいです。

――横浜 F.A.Dから始まり、全国各地を巡っていらっしゃいましたが、この「修行」という名前は、どこから来た言葉なのでしょうか。

「修行」という言葉を色々なところで見かけていたのですが、「修行」ってそんな簡単なものではないじゃないですか。本来の意味での「修行」というのは、成長するために、すごく大変なところに身を置き、己と向き合い、試練を課す。なので、そんな甘いものではないと思っていました。甘くないライブがしたかったのですね。

お話をしていて思い出したのですが、私はずっとシンガーソングライターになりたかったのになりきれていなかった、ということをコンプレックスに感じていました。シンガーソングライターになるために活動を始めましたが、お仕事の状況などもあり、色々なことを犠牲にしてきました。しかしながら、この環境に身を置いたのはシンガーソングライターになるためだったのに、そこに身を置いたことによって、シンガーソングライターでいられる時間をたくさん失ってしまいました。気づいたらもう10年近く経ってしまっていました。ようやく本当にやりたいことやれる環境を手に入れたわけですが、パッと振り返った時に、私と同じ夢を目指していたシンガーソングライターの子たちは、10年間シンガーソングライターであることを頑張り続けていたことに気がつきました。確かに私は色々な方に知っていただいたり、かけがえのない経験をたくさんさせていただいてきましたが、それと引き換えに、シンガーソングライターである時間を自分でなくしてきてしまった。他の皆さんと比べた時に、曲を作ったり歌ったりすることに向き合っている時間が圧倒的に少ないというのが非常にコンプレックスで。それを払拭したかったというのはすごくありました。

あとは、本当にきちんと修行をして、それを発信することで自分自身に対する認識も変えていきたかったですね。イメージチェンジをしたかったという理由もすごく大きかったです。ガワを作るためだけの「修行」という言葉ではなくて、きちんと実を伴った修行をします！という宣言ですかね。ピアノ弾き語りで、きちんと良い曲を作って、きちんと歌ってライブをするというのは、すごく難しいことです。今もそれにすごく自信があるわけではありませんが、きちんとそれをやりきりたいなと思って行ったツアーでした。

――ご自身の原点は路上ライブやピアノ弾き語りといったところにあると思うので、振り返ってみると、確かに必要なライブだったのかもしれませんね。

すごく大事です、すごく大事。普通に考えて、どんなメジャーアーティストだって始まりはインディーズで。ライブハウスで1本1本ブッキングイベントから出て、徐々に会場が大きくなって、やがてワンマンライブになる。そうして少しずつ関わる人が増えていくというホップ・ステップの段階の中に、アーティストはあるべきはずなんですよ。でも私はその修行期間を失って、飛び級をしてしまった。一見すると成功のように思えますが、アーティストとして着実に踏むべきステップに穴が空いているだけです。どこかできちんとその穴を埋める活動をしないと、穴に落ちてしまうんです。ちゃんとしたミュージシャンになりたかったからこそ、そのために時間を使わなければならないなとすごく思っていました。

――今の大塚さんの音楽やデザインなどのクリエイティブは、メジャーレーベルと同じようなクオリティ、むしろそれ以上になっているかと思いますが、確かにこれまでを振り返ると、そのステップがあったからこそ、視覚的にも肌感覚的にも、だんだんと成長していっているのが分かります。急に人の力を借りてドーンといくと、何というか、ある種ストーリーがないという。

飾り人形のようなものですからね。

――そういった意味で、「修行ツアー！」というのは非常に良いツアーだったのだろうなと感じました。

本当に皆様のおかげですね。

――そしてそのあと、「おさかなツアー！」「ごちそうさま、人生！」など、「アクアパッツァ」と紐づいたライブツアーが続きました。

懐かしいです。

メジャーかインディーズか。決断のタイミング。

――そして2023年11月6日にはBillboard Live YOKOHAMAでLIVE「グレートロマンス街道」を開催されました。先ほどの話に戻りますが、1年経ってライブをご自身で主催されるのではなく、ホップ・ステップの階段の中で、人のお力を借りたライブとなったわけですね。

そうですね。

――ビルボードのライブは久しぶりのバンド編成でのライブでした。「グレートロマンス街道」の思い出があればお聞かせください。

ちょうどその時に新たな会社さんにお声がけいただきまして。本当にありがたいことですが、色々なご縁があり、そのお力を借りてライブができました。この3年間のフリーの期間の中で、このライブの付近はイレギュラーな3ヶ月間だったと思います。

このタイミングは最後の私の悩みでもありました。そもそもずっとフリーでやる気はなく、メジャーでもっと良いなと思うご縁や環境があったら全然行きたいと思っていました。女性のアーティスト、若い女の子が一人で活動するというのは、まだまだ難しいことたくさんあると思うんです。実際、周りの同業者でも苦労している人もたくさんいますし。「一人では無理だろう」というのがどこかにあったので、助けて欲しかったんですよね。そしてそんな私を助けてくれそうな手を差し伸べてくれる人がいて、一度乗ってみたという。

セオリー通りの楽な道があるなら歩きたいという甘えがあったなと思いますね、振り返ると。だけど色々考えて、それを遂に捨てたのがビルボードの時だったかなと。ちょうどその期間って





「ドン・キホーテ・デート」がブラジルや香港でたくさん聴いてもらえて。たまたまYouTubeがすごい飛躍的に伸びて結果が出て、ドン・キホーテさんとかとコラボもできて。そのラッキーキャンペーンがたくさん続いていた時期でした。そのまますんなり上がっていけたら良いなとは思っていましたが、割と自分の中ですごく葛藤があったと言いますか。やりたいことを我慢してでも、本当に良いものを作ることは妥協してでも結果が欲しいのか。結果が出なかったとしても本当に自分がやりきったと思える良いものを作り続けるのかという。最後にかけた天秤で、後者が勝ってしまったのですね、自分の中で。

ビルボードのライブの時はそんな自分の気持ちがすごく出ていた気がします。MCなどもすごく生々しく、痛々しくもあったとも思います。そこに立つことに必死になっていた部分もありました。色々なことを捨てまくって立ったステージでしたからね。ビルボードのライブはすごく楽しかったけれども、すごく苦しかったです。でも、そんな苦しいことを選んだ決意のライブだったなぁという思い出がありますね。

ミュージシャンでありたい、そう思った。

――その後は「修行ツアー！vol.2」、「三度目のロマンス！」へと向かいました。ここでまた2nd LIVE「ロマンスは映画より奇なり」の時と同じく、パーカッションとピアノという3人編成になりましたね。これは「グレートロマンス街道」が自分の中で違ったな、という思いがあったのでしょうか。

別に違ったわけではなかったのですが。本当に自分の問題で。与えていただいてステージに立ってしまうと、結局、自分の実力の範疇外でお人形さんになってしまうだけだなと。それだとどんなに形式上素晴らしいライブだとしても、多分心には届きませんし。私はちゃんと回り道しないと駄目な人なのだろうなと思うんですよね、すごく。だからこそ、人に伝わるような形で、ちゃんと回り道をした自分の音楽の価値を知っていただけるライブをしたいなと切に思いました。

作品を出すにしても、数字上結果を出すにしても、やっぱり実が伴ってないと私自身が納得しないし。中身が伴っていないまま数字を出すということをやって、虚しいなぁって思ったことなども実際にありました。まあ、それはわがままな悩みではあるんですけどね（笑）でも本当の感動とか本当の幸福論みたいなものを追い求めた時に、ちゃんと自分自身が育ってないといけないなって、すごく思ったのかもしれないです。

「三度目のロマンス！」に関して、もう一度、かん（菅野可奈子）さんと結里（岩佐結里）さんと一緒にライブを作りたいって思ったのは、私自身がもっとできることがあったなって思ったからというか。このライブをもっと良くしたい、このアンサンブルをもっと良くしたいっていうことを、もっと責任を持って発言もしなきゃいけないなって思ったんです。なんというか、ミュージシャンとしての考え方とか知識みたいなものをもう一度自分自身に問いかけたかったんですよね。もちろんかんさんも結里さんもすごい人なんですが、もっと言ったらもっと良くなったりとか、それぞれがそれぞれの配置に適切に置くと、もっと良いサウンドになったりとか。自分自身を客観的に見れるようになってきたからこそ、ある種プロデュース的な視点を持って考えて、それをやりきりたいなって思ってた時期だったんだと思います。

分かってくれる人が分かってくれればいいや、って。

――なるほど。そんな思いを胸に、「修行ツアー！vol.2」追加公演の「ごちそうさま、人生！」、SUMMER SONIC 2024に出演し、2024年10月には下北沢Half Moon Hallでのバースデーライブ「CREWSING!!29」を迎えました。Half Moon Hallは少し特殊な箱ですが、どうしてあそこでライブを行ったのでしょうか。

なんかニッチな会にしたかったんだと思います（笑）去年はとにかく自分がようやくミュージシャンになれたなって思っていて。というのも2024年の上半期ほぼ毎週ライブやってたはずで、確か20何本だったかな？めちゃくちゃライブやってたんですよ。先ほどお話したように、自分自身がシンガーソングライターになりたいだけの人間だったところから、ようやくちゃんとシンガーソングライターだという自負を持ち始めた頃でした。それがとにかく楽しかったから、なんか結果とかどうでもいいやってなっちゃってたんだと思います。その時は「分かってくれる人が分かってくれればいいや」っていう気持ちがすごい強かったんです。逆に、自分のライブを見て、自分が思うようなキャッチの仕方をしてくれない人がもしいたら、それは嫌だなってすごく思っていました。だから、分かってくれる人だけに分かってほしいライブを無意識にやっていたんですよね。今振り返るとそうだったんだろうなと。

――なるほど。そんなライブが「CREWSING!!29」だったんですね。

そうですね。その時期辺りまでは良い音楽、良い音楽…という言葉は難しいけど、ちゃんと良いライブしたくて、ライブを観て、「いいね」って思ってくれる人だけ観てほしいって思っていました。

環境的、金銭的にやれることがすごく少なかったからこそ、いい演奏をして、いいパフォーマンスをするっていう音楽的に当たり前なことに向き合いました。そのシンプルなやり方って、音楽が好きだったり、ちゃんとその場で何か受け取ろうって、一生懸命ライブを観てくれる人じゃないと受け取れないものだとは思うんですよね。今ってライブもかなり多様なエンタメ化をしているので、ルックス、衣装、照明など、音楽以外のいろんな要素がライブを構成しています。けど、当時の私にはそういう力がなくて、もう歌と表現と演奏で勝負するしかない環境に身を置いている。だからこそ、それを受け取りに来てくれる人にしか観せたくなかったんだろうなと思います。そういう意識が良くも悪くも働いちゃってたんだろうな。

風向きが変わったライブ「ザッツマイアイデンティティ」。

――確かに今年の2月に行ったSae Otsuka LIVE 2025「ザッツマイアイデンティティ」くらいまでは割とそういう方向だったかもしれないですね。自分が内に向きすぎてるなと気づいた瞬間というのはいつなのでしょうか。

内に向いているなとも思ってなかった。というより多分、基本的に内を向いているんだと思います。別に今もそんなに変わってないから、多分私はすごく内向的な人間なんでしょう（笑）

とはいえ2025年2月のKT Zepp Yokohamaでの収録ライブ「ザッツマイアイデンティティ」で少し風向きが変わったなとは思います。そのライブで今回のメンバーの方に集っていただいて、収録をさせていただいたんですけど、めっちゃ豪華じゃないですか。今時Zeppで収録、カメラもたくさん入って。照明や音響もあれだけきちんと用意していただいて。ミュージシャンの皆さんの演奏も素晴らしかったですし、製品としても、ミックスをいつもお願いしている超売れっ子エンジニアの麻樹（小杉麻樹）さんに頼んだりと、もうすごい豪勢にやりました。本当にいろんなスペシャリストにこの映像ライブ作品を作っていただいて。なんか自分独り事じゃなくなったんだと思います。実際このタイミングから色んな人が関わってくださるようになりましたし。

フリーでやってるってことが大きいんだと思うんですが、私の現場に関わってくださる皆さんは、何かしら一緒に背負ってくれてるんです。一緒に夢見てくれてる。ただその時やったら終わる義務的な仕事じゃなくて、「やろう！」って、本当にやりたいって言ってくれる人しかいないことって、すごいことだと思ってて。そんな皆さんの思いを感じた時に、すごい人がこんなに集まって、今こんなにいいもの作ってて、なぜ世に広まらないんだろうって、すごい疑問に思っちゃったんですよね。だから自分ごとだけじゃなくなったんだろうなと。

――しかし、今年はその2月を経て、大きな動きはありませんでしたよね。8月からは路上ライブを開催するようになりましたが。

そうなんですよね。実はライブは意識的にやめてたんです。この半年、1年弱かな。すごい自分の中で変化があったから。変化が起こることも分かってたから。

一度、ライブしない期間を作って、めっちゃ成長して、すごくなって、なんかワッと驚かせたいなって気持ちがあったんです。なんかもう今までの自分じゃいられなくなっちゃうっていうか。環境がすごい変わった時って、人は成長すると思うんですけど。成長って変化じゃないですか。私よく思うんですけど、タレントやアーティストみたいな人前に出て活動する人って、基本的に成長したら「すごい！」ってリスペクトの気持ちを抱いてはもらえるんですけど、その成長した姿に変わらずに付いてきてもらえるかはまた別の話だと思ってて。そのままでいてほしいものだったりするから。

仕方ないことだけど、変化すると離れていく人ってやっぱ絶対数いるんですよね。悲しいけど、それはそれで受け入れていくしかないんです。でも逆にプラスの方面で考えると、その成長した自分だから出会える人もいるし。

「ロマンス至上主義」が私の中ですごく大きな出来事だったから、すごく大きな出来事にするために、ちゃんと時間を空けたかったっていうのがあるんですよね。そんな中で、今では乖離してしまったであろう「みんなにとっての大塚紗英」をある種捨てて、初めましての準備をしたのが路上ライブでした（笑）

――なるほど。そういう意味でもやはり路上ライブは大塚さんの原点なのかもしれないですね。

路上に関しては、自分自身と向き合った時に、やっぱり歌が好きだなという気持ちを確かめる催しだったかもしれないです。15歳で始めて、4年ぐらいやって。そこからバンドの活動とかが始まっちゃったから、路上はやらなくなって。路上ライブをしたのは10年ぶりとかなんですが、その根幹にある気持ちは思ってたより変わってなかったんですよ。私、音楽が好きで、曲作るのが好きなんだけど、作って満足じゃなくて、自分の言葉に自分の魂を乗せて届けたいっていう気持ちがすごい強かったんだって改めて思いました。で、それがうまくいった時、すっごく嬉しいんだっていう。私にとって歌うことは、自分の歌詞に自分の魂を乗せて人に渡すところまでなんだなって。それを思い出す旅だったかもしれません。

――まさに、今年の7月に沖縄に行って書いた曲のテーマですね。

そうですね。うん。

ロマンスで革命を。

――ということで、そんな路上の旅を経て、本日10月10日、4th LIVE「ロマンス至上主義」を開催をすることとなりました。改めまして、この「ロマンス至上主義」というタイトルについて教えてください。

本当はこのライブでやりたかったことは革命なんですけど、革命をまだ起こせる力はないなって思ったんです。であれば、まず「革命を起こしたいんです」っていう宣言をしようと。で、その思想の提示をするという意味で、私はロマンスを最も大事にしてます！というスローガンを掲げるっていうタイトルにしました。

その革命を、「ロマンス革命」と名付けてるんですが、それは何かというと、私のようなメジャーからインディーズに立ち返った一人の女性シンガーソングライターが、もう一度右肩上りになって、ライブやアーティスト活動の展開を広げていくっていうところにあるんです。なぜならそれって普通に考えたら、ほぼ不可能に近いことだから。それを今こそやりたいなってすごく思ったんです。

昨今の音楽業界は、CDを売らないと成り立たないやり方を未だにしている。だけど実際のところ、CDはもう昔に比べたら遥かに売れなくなっている。業界自体、毎日が自転車操業みたいになっている中、一人のアーティストが継続的にリリースを続けていくということは非常に困難なんですよね。むしろ会社としてはたくさんのアーティストを抱えて、小ヒットを出し続け、どうにかこうにか会社を回し続けているような気がします。でも結局それって錆びかけた歯車でどうにか会社という車輪を回してるだけだから、その歯車が錆びてしまうと、新しいものにしなければいけない。結局アーティストという歯車を新しく交換し続けなければならないということになると思うんです。

そうなると、アーティストが一人のミュージシャンとして一生生きていくということはもう音楽業界では考えられてない。でもそれってどうなんだろうって思ってて。その人に才能があることとかすごく努力をされて実力を持ってることは前提なのですが、その上で、たまたますごく良いクジを引く力を持ってないと、音楽業界でうまくいくことは厳しいっていう。メジャーに乗っても、本当の意味で成功して、生き残っていくことなんて95%不可能みたいになっちゃってるんですよね。それってなんか在り方としてどうなんだろうっていうのを、フリーになる時から疑問に思っていました。すごく頑張って活動をして、でも運だけに作用されてしまうアーティストたち。色々な才能があって、人柄も素敵な最高のアーティストたちがどんどんどんどん姿を消してくのを見てて苦しく思ってたんですよね。

私の活動の指針として、そうじゃないやり方を提示できたらいいなっていうのを考えていたんです。それが何かはまだ私もわからないし、結局自分たちはただ一生懸命走ることしかできなくて、上手くいくなんてただの結果論でしかないんだろうなとは思うんですが。

でもそんな世の中でも、こういうミュージシャンがいるんだなとか、こうやって繋いでいく方法があるんだなみたいなことをまず業界の人に提示したかったのはすごくあります。これは私のわがままな願いなだけなのですが、それと同時に、音楽っていうエンタメを受け取る皆さん、ファンの皆さんも、音楽の価値を思い返してほしいなっていう願いはあったんですよね。

今ってSNS上でも何でも、音楽って無料で使用できるものになっていて。当たり前にミュージックビデオも音源も全て無料で見られるものになって。私もいろんな人のものを無料で楽しんでるので、そういう世の中っていうのもよく理解しています。でも音楽が無料になったことで、音楽っていうものがどうやって生み出されて、どういう価値があって、ってことも考える人ってすごく少なくなったんだろうなって思っています。なんかびっくりするんですよ。撮影禁止でも当たり前のようにライブを撮影しちゃうお客さんがいて、それがSNSに載っていたりとかするのを見た時に。衝撃を受けるっていうか。その人がどうこうというよりも、そういうことをするって多分、そのライブをすごく価値があるものだとは感じていないってことだと思うんです。本当に楽しみたいのであれば、その光景を目に焼き付けるだろうなと。だからこそ、私はもっと音楽の価値を知ってもらえるライブしたいなっていうのをすごく思っています。

オスカルのように信念をまっすぐ貫き通せる道を選びたい。

――ありがとうございます。そんな今回のキービジュアル、ライブのコンセプトなどのお話を伺いたいです。

キービジュアルはフランス革命をテーマに描かれた漫画、『ベルサイユのばら』のオスカルがイメージになっています。オスカルはフランス貴族の家庭に生まれたのですが、女性だけど男の子のように育てられました。フランス衛兵隊としてお勤めをする最中、王政が終わって革命が起きるという時に最終的に市民軍に寝返った人物です。

私はオスカルの生き方がすごくかっこいいなって思ってて。自分の信念とか正義っていうものを一生懸命考えて選んで、覚悟を決めて貫き通すっていうあり方をすごく尊敬をしてるんです。自分自身に立ち返った時に、恐らく私は元々は市民というより、オスカルのような貴族の家庭の生まれ、言い換えるならば、恵まれた環境に身を置いてる人のように見えると思うんです。もちろん自分自身もそういう境遇に感謝している部分はたくさんあるのですが、そこにあぐらをかくことなく、オスカルのように何が自分の信念かっていうのを考え、覚悟を決めて、信念をまっすぐ貫き通せる道を選びたい。たとえそれが過酷な茨の道だろうとも、進んでいこうっていう。そういう覚悟みたいなものを、キービジュアルに出しました。





――そんな今回のライブのバンドメンバーは2月に行われた収録ライブ「ザッツマイアイデンティティ」と同じですが、皆さんの魅力をご紹介いただきたいです。

ギターの増崎孝司さんは本当にお父さんという感じですね。「どんな言語よりそれはアイラブユー。」でベースを弾いてくださった二家本亮介さんは、増崎さんは東京のお父さんだとおっしゃっていましたが、その気持ちが少しだけ私も分かるかもしれないと思いました(笑)すごく歌や曲を大切にしてくださっていて、この曲に対して自分がどうあろうかということをすごく意識して弾いてくださいます。ギターはすごく前にグイグイ出る楽器と思われがちですが、増崎さんのギターは彩りと同時に土台まで添えてくださる感じがして、すごく頼もしいです。

ドラムの則竹裕之さんはすごく華がある方だなと思います、一言で言えば「スター」ですね(笑)お人柄もとても温厚で丁寧な方だなぁと思っているのですが、RHを重ねる中で、実はとても情熱的な方なんだなと思うようになりました。やればやるほど、一緒に音楽をしている感じがすごいです。サウンドもとてもすごく魅力のあるもので、一聴すれば、「あ!則竹さんの音だ!」ってなるのがとてもすごいなと思います。

ベースの下野ヒトシさんですが、下野さんはもう聴いたことないくらいベースがいつも派手で「ギラーン」という感じで。真夏の太陽みたいだなぁといつも感じるのですが、派手さだけではなく、優しさと、鋭いこだわりを持ち合わせている方だと思います。プレイに関して、多分私が想像もつかないような緻密な物差しの中で戦いながら弾いていらっしゃると思います。このテクニカルなバンドの中で、下野さんにベースを弾いていただいていることが、サウンドとしてまとまるための大きな要素だと感じます。

最後は松本圭司さん。圭司さんは私の楽曲のアレンジ、そして今回はバンマスもしてくださっているということで、恐らく誰よりも深い感情で大塚紗英というアーティストに向き合ってくださっていらっしゃるのだと思います。演奏中、圭司さんとふいに目が合う時、何もかも見透かされている感じがして少し怖いです(笑)それくらい音楽の中にいる時にものすごく深い感性で物事を捉えられている方なのだろうなと思いますね。技術も素晴らしいですが、圭司さんが天才たる所以はその深すぎる感性から来るものなのだろうなと思いますね。

こんな素晴らしいメンバーなので、とにかくフレーズがすごくいっぱい散りばめられていてて、なんだか少し戦いのような気持ちになる時もあります(笑)それも含め皆様のプレイが大好きです。

――最後に、このライブをご覧になる方に何を感じていただきたいか、そしてこのライブでご自身がどうありたいかを伺わせください。

生きることの喜びを伝えたいです。人生、山あり谷ありというように、辛いことや色々なことがあると思います。いつも思うのですが、すごく苦しいからすごく幸せなのであって、大して苦しくなければ大して幸せでもないという。多分、私のライブはすごく痛々しい部分や「うー」っと胸が苦しくなる瞬間もあると思います。でも、本当の苦しみと本当の喜びというものが表裏一体であることこそが、生きることの素晴らしさなのだということを味わいに来てほしいです。… とカッコいいことをいいつつ、端的に言えば、どんな人にも感動したなぁと思っていただけたら嬉しいです(笑)

自分のあり方に関しては難しいです。もう本当にこのライブを終えたら私は死ぬと思っているくらい色々なことを賭けてきたので。一旦燃え尽きるつもりで全てを賭けてみたいなと思います。「命懸け」とか「死ぬ気で」というのはすごく簡単な言葉ですが、本気でそれを実行してみたいなと思っています。

――ありがとうございます、それではライブ楽しみにしております。

頑張ります!

プロフィール

大塚紗英　おおつか・さえ　1995年10月10日生まれ。神奈川県出身のシンガーソングライター。5歳ではじめて作曲をし、15歳で横浜駅西口高島屋前にて全曲オリジナルのストリートライブ活動を開始。2015年「BanG Dream!」プロジェクトのガールズバンド「Poppin' Party / 花園たえ役」として声優活動を開始。シンガーソングライターとしては「言葉は世界、言葉は景色」をテーマに独自の感性、ワードセンスで独創的な世界を描き出すことを得意とする。

2020年2月、avex traxからソロデビュー。2023年にリリースした「全人類ヒューマノイド」「ドン・キホーテ・デート」「蛍陽」は公開から3ヶ月足らずで100万回再生を超え、2025年現在、YouTubeチャンネル登録者数も40万人に到達。日本のみならず、世界中からも注目される若手女性シンガーソングライターの一人である。



大塚紗英 1st Full Album

◆ロマンス至上主義◆◆◆◆◆

2025.10.10 Release

ロマンス至上主義 パッケージ内容

「ロマンス至上主義」刺繍入り ロマンス革命ユニフォーム
「ロマンス至上主義」CD
アパレルブランドタグ風パッケージ
音源・ブックレットDL用特設サイトアクセス洋服タグ

■M01 7月のREPLAY

作詞・作曲：大塚紗英　編曲：松本圭司

本曲は2020年2月に発売されたソロデビューミニアルバム「アバンタイトル」に収録されていた楽曲のリアレンジ版。楽曲がリリースされた当初はいわゆる「夜系」的なミニマルロックサウンドだったが、今回のアレンジでは、2025年のテーマであるジャズを多分に取り入れたサウンドに。当初のアレンジに比べるとややテンポは下がっているが、そうすることで、よりメロディが呼んでいるアレンジへと近づいた。

本リアレンジのテーマは「REPLAY」。その当時では叶わなかった理想の再現である。2020年から5年経った今、自身の技術的成長と音楽的成長が融合したことで、曲を書いた当時の自分が理想とする楽曲へと仕上げることができるのではないか、というところが本曲の目指すところであった。そんな理想の形を叶えてくれたのは、4th LIVE「ロマンス至上主義」でバンドメンバーを務める、増崎孝司、則竹裕之、下野ヒトシ、松本圭司ら4名。バンマスでもある松本氏による刺激的でエキセントリックなアレンジを、日本を代表するミュージシャンたちが具現化した。このアレンジは、この4人のアンサンブルでしか表現できない。そう言わせるようなプレイとグルーブを感じさせる楽曲に仕上がった。

あの7月を、今、REPLAY。

■M02 恋人じゃない何か

作詞・作曲：大塚紗英　編曲：松本圭司

本曲はこれまでとは打って変わり、生楽器を基調としたラテンジャズ×ファンク調のミディアムナンバー。「恋人ができると、日常が輝いて見え、そのキラキラは日々の喜怒哀楽に寄り添ってくれる」ということをテーマにしたラブソング。セクションごとにカラフルにコロコロと変わっていくサウンドの展開は、まさに恋人からそれ以上の何かに変わるようなドキドキ、そしてそんな日々の煌めきを表している。

日本において、ジャズアレンジはあるが、そもそものアレンジとしてジャズを取り入れたJ-popが少ないというところに見てとれるように、J-popとジャズが有機的に混じり合うことはそう多くない。しかしながら、本曲は極めて本格的なジャズ・ラテン的なサウンドながら、J-popとして仕上がっている。その秘密は大塚の歌詞や歌唱、そして声質にあるだろう。彼女のポップでキュートな歌詞やメロディ、そして自身のハスキーボイスが妙にマッチして、クセになる。それが本曲をJ-popたらしめている所以だと言っても過言ではないだろう。ともすれば生楽器の演奏に歌唱が遅れをとってしまうことがあるが、本曲ではむしろ大塚の歌唱がアンサンブルにおいて主導権を握っている。自身のバックグラウンドにジャズがあるというところに端を発したアレンジであるが、アーティスト性、そして音楽性の幅を広げ、固定化するために行ったアグレッシブな挑戦は大成功したと言えるだろう。

そんな本格的ラテンジャズ×ファンクのアレンジを務めたのはかつてT-SQUAREでキーボーディストを務めたピアニスト・キーボーディストの松本圭司氏。氏のラテンやジャズに対する音楽的造詣の深さ、そしてポップスに対する姿勢もこの楽曲をJ-popたらしめる所以となっている。今回はそんな松本氏だからこそ集められる、ジャズ・フュージョン界の精鋭たちによって、レコーディングが行われた。同じくかつてT-SQUAREに所属していたベース 須藤満、ドラム 則竹裕之、サックス本田雅人を筆頭に、トロンボーン 村田陽一、トランペット 西村浩二、パーカッション 福長雅夫と、まさに豪華の一言。一度でも楽器に触れたことがあるものであれば、その名を知らぬものはいないほどの名プレーヤーたちによって作られた本曲は、昨今のポップスシーンでは稀に見る、サウンドとしても意欲的な作品となっている。

■M03 どんな言語よりそれはアイラブユー。

作詞・作曲：大塚紗英　編曲：石塚知生

本曲は「言葉や種族を超えた愛」をフュージョン×シンセサウンドで表現したミディアムナンバー。死や別れは人や動物、その他命を持ったすべてのものが避けられないことである。その死に対して悲観的になるのではなく、命が尽きるその時まで、そしてその時ですら愛を持って迎えたいということを歌った楽曲。

そんな深い愛を大塚らしい熱量のある声色で表現した。昨今のメジャーシーンの楽曲群と比較すると、非常に熱量が高く、感情が剥き出しとなった歌唱であるように思われる。しかしながらこれがまさしくアーティスト大塚紗英の本質である。歌詞は思想であり、その思想を伝えるのが彼女にとっての歌である。シンガーとしての技量や表現力が多分に発揮された楽曲となった。

また本曲ではシンガーとしてのみならず、ソングライターとしての才も光る。テーマとしては非常にありふれた日常のワンシーンでありながらも、その類まれなるワードチョイスゆえ、ただの陳腐な楽曲とならず、その日常があたかも存在していて、まるで自分ごとのように思わされる。また通常であれば、1サビの後には2番が来るが、本楽曲には2番が存在しておらず、Dメロに進むという奇抜な構成になっている。構成としてはやや突飛だが、それでもなお飽きさせない起伏に富んだメロディゆえ、この曲は一貫したポップさを保つことができている。

今回のサウンドのテーマは前作「恋人じゃない何か」に引き続き、本格的なジャズ・フュージョンサウンド。大塚の持つポップなメロディセンスの中に隠されたジャジーな一面を拾い上げ、それを全面的にサウンドとして昇華した意欲的な作品に。そんな複雑ながらも一貫したポップさを持ったアレンジを施したのは日本のポップシーンを牽引してきたアレン

ジャー・石塚知生氏。複雑なコードワークやキメ、そしてエッジの効いたシンセサウンドで本格的なフュージョン感を演出しつつも、ポップスとして非常に聴き心地の良いものとなっているのは、音楽に造詣が深く、かつ歌詞の世界観を巧みに落とし込む技量を持っている鬼才 石塚氏だからこそできることだろう。

■M04 マーキング -r.e.i.w.a-
作詞・作曲：大塚紗英　編曲：船山基紀

本曲は2020年2月に発売されたソロデビューミニアルバム「アバンタイトル」に収録されていた楽曲のリアレンジ版。オリジナルでは、ギターとストリングスをフィーチャーしたロック色が強いものとなっていたが、今回のリアレンジでは、ジャズ・フュージョン的な要素を追加した歌謡フュージョン的アレンジとなった。

本曲のアレンジを務めたのは、日本のポピュラー音楽史にその名を刻む稀代の編曲家・船山基紀氏。ヒット曲の料理人であり、イントロの魔術師とも呼ばれた船山による本曲のアレンジは、どこか懐かしいようではあるが、全くもって最新であり、非常に大胆、かつ革新的なアレンジとなっている。ドラム、ベース、ギター、ピアノ、パーカッション、ブラスという全て生楽器による構成の楽曲であるが、その全てが有機的な繋がりをみせている。縦の美しさ、そして横の美しさが絡み合った本曲のアレンジは、まさに日本のポピュラー音楽史を概観するものであり、さらにその先を行くものとなっている。

本作は前々作に続きミュージシャンも名プレーヤー揃いだ。DIMENSIONのギタリスト・増崎孝司、T-SQUAREのベーシスト・田中晋吾、CASIOPEAのキーボーディスト・安部潤などを筆頭に、正真正銘、ミュージシャンズ・ミュージシャンたちが集結した。大塚の歌唱のみならず、インストゥルメンタル音楽のファンにとっても非常に聴き応えのある一曲に仕上がった。

大塚の活動に戻ると、ここ最近の活動では、昔の楽曲のリアレンジは避けてきた。それは常に新しい楽曲を作ることで、その時の心境や環境、そして時代や潮流を歌うためだ。しかしながらここでリアレンジをした理由は一つ。これまでに築いてきたギタリストとしての大塚というイメージを完全に壊すためである。これまでは自身が参加するユニットから、ギタリストとして見られること、そして声優アーティストとして見られることが非常に多かった。しかしながら彼女は元来シンガーソングライターであり、ピアニストである。オリジナルではギタリストとしての面を全面に出したアレンジとなっていたが、今回はアーティスト「大塚紗英」として、楽曲の良い部分を新たに再構築して、再度表現を行った。破壊は創造。この楽曲を踏まえて、ギタリストとしてのイメージを払拭、そして決別をし、見る人、聴く人にもそれを知らしめるものとしたい。

■M05 アクアパッツァ
作詞・作曲：大塚紗英　編曲：鈴木雅也

本曲は家族や大切な人への究極の愛を、イタリアの郷土料理「アクアパッツァ」に喩えた令和一の究極のラブソング。究極の愛とは許すこと。そして時間が経って、形が変わってしまっても、思い続け、愛し続けること。そして、いつか死を迎える時でさえ、死は決してネガティブなものではなく、愛に満ち溢れたものであると思いたい、という大塚の人生観を反映した内容となっている。愛や死という重いテーマながらも、全体がポップなトーンに仕上がっているということが、極めて大塚らしい。愛を愛として、死を死として書かず、「アクアパッツァ」という少し他とは違った視点で描くというのがまさに彼女流のソングライティングである。その着想の独自性ゆえ、ともすると普遍的になりがちなテーマが陳腐なものとはならず、シンガーソングライター 大塚紗英らしい、含蓄に富んだ面白い歌詞へと仕上がった。

本曲のアレンジのテーマは「カラフル」。全体としては、まるでアクアパッツァの色とりどりの具材たちのように、多種多様なブラスのサンプリング素材やシンセサウンドなどでコラージュしつつ、セクションによって変わるリード楽器、コードワークなどはまるでおもちゃ箱のようなカラフルなサウンドになっており、聞く人は曲を追うにつれて、違った味を楽しむことができるような構成になっている。まさに料理の「彩り」とサウンドの「彩り」が巧みに掛け合わせられたゴージャスで華やかなサウンドとなった。

近年では稀に見るド直球ポップソングながらも、音楽としてはどこか大塚らしい「えぐみ」のあるラブソングをご賞味あれ。

■M06 蛍陽
作詞・作曲：大塚紗英　ピアノ演奏：林 正樹

本曲は絶望の淵にありながらも、未来を信じることで、その先が見える。そうではないかもしれないが、そう祈って生きていくことが自分の救いになるのだ、という大塚自身がそれまでに経験した人生の物語を肉薄する形で描いた楽曲である。この楽曲の歌詞のテーマを言葉にするのは容易ではない。なぜなら、この楽曲で描かれる絶望というのは、おそらく彼女にとって筆舌しがたいほどの絶望であり、人に理解されうるようなことではないからだ。

そんな大塚は、今回、言葉だけで伝えるのではなく、音楽という絵画でそれを伝えることに挑戦した。絵画を描くために声をかけたのは自身もアーティストとして活動する林正樹氏。NHKや映画の劇伴を手がける彼のピアノはまるで水彩画のように繊細でカラフルである。時には静寂を、時には情熱を歌う彼の演奏は、日本においてもまさに唯一無二である。そんな彼の描き出す世界に、大塚は自身の想いを委ねた。

今回の楽曲は通常の録音とは異なり、大塚と林氏の同録によって行われた。通常はレコーディングの際にBPMを示す「クリック」を聞きながら録音するのだが、今回の楽曲ではそれをカットしてレコーディングに臨んだ。というのも、この楽曲のパルスは機械的に数字にできるものではなく、そのリズムは大塚と林氏の二人の世界の中にだけ存在しているものであったからだ。この時のレコーディングは、まるでライブペインティングを見ているかのようであった。お互いの感情にお互いが共鳴し、そこでリアルタイムで音楽という絵画が作られていく。録音が終わったその瞬間、かつて「ホタルビ」というタイトルだった「蛍陽」は、まさに芸術作品となったのだ。

そして私たちは出来上がった絵画を見て、この物語が彼女にとってどのようなものであったかを考え、ただただ受け入れるのだ。

■M07 ザッツマイアイデンティティ
作詞・作曲：大塚紗英　編曲：鈴木雅也

本曲は2019年にテレビアニメ『エッグカー』主題歌として使用された、自身のアーティスト活動の出発点とも言える「What's your Identity?」へのアンサーソング。メロディはオリジナルに準拠しながらも、「ザッツマイアイデンティティ」というタイトルにもあるように、歌詞は自身の活動の中で見つけてきた「自分らしさ（=アイデンティティ）」に対する一つの解を綴ったものとなっている。

失いかけていた「自分らしさ」を再発見する険しい旅路は、壮絶なものであったのだろう。オリジナルとはまるで異なった複雑な構成、シネマチックなストリングスと激情的なドラムンベースによって表されている彼女の音楽は、聴くだけで心を揺さぶられる。彼女にとって「アイデンティティ」を見つける旅がいかに険しく、大変なものであったかということを、私たちは彼女の音楽を通してまざまざと痛感させられる。歌詞やサウンドだけではなく、そのことは大塚の歌唱にもよく現れている。私たちが見る彼女は明るく、ひょうきんでチャーミングな一面が多い。しかしながらこの楽曲で見せる彼女の表情はそれとは真逆の、自分自身に向き合うことへの悲痛さが現れたものとなっている。とにかくがむしゃらで、それでもうま

くいかない。私という存在はなんなのだろうという、自分自身でしか見つけられない答えを導き出すことの辛さが色濃く現れている。

少し引いた観点から見ると、この曲を聴くことで、歌というものに対して改めて考えさせられる。「良い歌」というのはなんなのか、ということだ。一般に「歌が上手い」というのはピッチやタイミングの正確性、キーレンジが広いことを指す。しかしながら、それは「良い歌」ということに対する答えになるものではない。では「良い歌」とは何なのか。それはリスナーを歌詞や音楽の世界にいかに引き込むことができるということではないだろうか、とこの歌を聴くと思うのだ。音程やメロディというのはあくまで手段（ツール）であって、歌というのは感情や思想の発露が主なのだ。我々はこの歌を聴いた時に、大塚の悲痛な想いや壮絶な体験に想いを馳せる。それこそがまさに「良い歌」である。そしてそれを他人事ではなく、まるで自分ごとのように思えるのだ。筆者はこの歌を聴いて、「歌」というものに想いを巡らせた。

この曲を聴いたものは皆、大塚紗英というアーティストの人生や生き様のみならず、自身のアイデンティティや在り方にも向き合うことになるだろう。

■M08 ドン・キホーテ・デート
作詞作曲：大塚紗英　編曲：佐藤厚仁

本曲は、前作「全人類ヒューマノイド」と打って変わって、大塚紗英ワールド全開の"やばい！"アッパーなファンクナンバー。ジェットコースターのようにめまぐるしく展開する感情を歌った本曲は、私たちをまるで熱い恋の渦中にいるかのように錯覚させる、リアルでスリリングな一曲に仕上がった。その情景が眼前に浮かぶのは、大塚の歌唱にある。全体としては情熱的ながらも、どこか扇状的で、感情の起伏に富んだ歌唱は、私たちをただの傍観者ではなく、このストーリーに参加しているような気持ちにさせる。まるでこのストーリーが自分ごとのように感じさせるのだ。

歌唱もさることながら、その肉薄する恋愛の熱を感じさせる要因の一つは大塚ならではな歌詞にもある。「私達ドン・キホーテ・デート以上恋人未満でしょう？」に見られるように、本作には目を惹くキラーフレーズたちが随所散りばめられており、大塚のワードセンスが光る歌詞となっている。大型ディスカウントショップ「ドン・キホーテ」の名をタイトルや歌詞に入れ込んでいる点からも、大塚紗英というアーティストの異質性とそのワードチョイスのセンスが窺える。この楽曲は大塚にしか書けないし、歌えない。まさにアーティスト 大塚紗英の真骨頂的楽曲と言っても過言ではないだろう。

サウンドは昨今では珍しいアッパーなフュージョン・ファンクテイスト。全体としては80's フィールなジャズ・フュージョンサウンドながらも、生ブラスのグルーヴと打ち込みが巧みに融合した現代的なサウンドに仕上がっている。それもそのはず、アレンジャーの佐藤厚仁は音楽人生において、ファンク・フュージョンをこよなく愛し、その愛したサウンドを若い感性で取り入れているからだ。「本物」と「（ある種の）偽物」をよく理解し、その取捨選択を巧みに行うことで、決して古くも嘘にもならない、現代におけるポップファンクのアレンジを見事に仕上げてみせた。

そんな本曲は「リバイバル」という言葉に収まらず、リバイバルの先を行く、2023年進行形のシティポップに仕上がっている。竹上良成率いるホーンセクション、数多くのファーストコールベーシストとして名高い川崎哲平をはじめとしたジャズ・フュージョン界を代表する名プレーヤー、日本の代表的なJ-popを手掛けてきた巨匠 小杉麻樹の作り出すド派手なサウンドに乗り、シンガー大塚紗英が縦横無尽に駆け抜ける楽曲となった。

■M09 人生は愛と夢と冒険だ
作詞・作曲：大塚紗英　編曲：鈴木雅也

本曲は自身の座右の銘である「人生は愛と夢と冒険だ」をタイトルに冠した楽曲。これまでの楽曲とは異なり、昨今では珍しいストレートで泥臭い歌詞が印象的なものとなっている。「無我夢中でやれよ死ぬまで 死ぬまで」という言葉に見てとれるように、どんな困難があろうとも、自身と向き合い続け、そしてやり続けることが大切なのだということを歌った人生の教訓的歌詞は、大人になった私たちの心に強く訴えかける。ふと自分の人生を振り返った時に、やりきったと言えるものはあるだろうか。歳を取れば取るほど、人生というのは色褪せていき、未来に想いを馳せることを知らず知らずのうちに避けているのではないだろうか。まさにそんな誰にでも思い当たるような悩みを力強く歌った楽曲となっている。

そんな人生論を謳う一方で、大塚のファンコミュニティである「クルー」の重要性を歌った楽曲でもある。Bメロ「好きなものだとか 仲間とか 出会えるさ まだまだまだまだこれから！」というフレーズは、支えてくれている「クルー」のことであり、自身にとってクルーの重要性、そしてそんな「クルー」同士にとってお互いが重要であるということを歌った。Bメロの隙間を埋める「Love! Dream! Adventure!」というコーラスはまさにライブでのコールから着想を得たものとなっている。
そんな大塚の泥臭い人生論のアレンジを手がけるのは、大塚のアレンジも数多く担当する往年の名アレンジャー 鈴木雅也氏。氏の巧みなコードワーク、音色、プログラミングセンスによって、緻密で洗練された多幸感のあるポップソングへと仕上げられた。

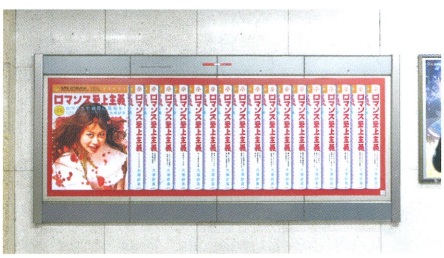




ロマンス至上主義 交通広告
場所：東京メトロ九段下駅
期間：2025年5月26日〜6月2日

Client：株式会社kibatsu
Art Director：伊藤ユキノブ（RICOL）
Photographer：池田博美
Hair&Make-up：翁 咏健

RICOL









ライブのテーマは「ロマンス革命」
ロマンスとは、自分の生きる意味
ロマンスとは、魂の研鑽
ロマンスとは、色鮮やかに生きることではない
ロマンスとは、苦しいことを美しいと思うこと
昨今の音楽業界を取り巻く状況
与えられた境遇や巨大資本に
ロマンスという言葉で立ち向かう
そんな、革命の物語の始まり
たとえ庭園に咲く薔薇にはなれずとも
激しく気高く、野に咲く薔薇となれ
さぁ、ロマンスの種子たちよ
今こそ芽生えの時
今回のライブは
「ロマンスで世界に革命を起こす」
大塚紗英の生き様の提示

#ロマンス至上主義

Great Romance Records
SAE OTSUKA

ROMANCE SUPREMACY

The theme of the live event is "Romance Revolution." Romance is the meaning of her life.
She'll stand up against the current music industry and the huge capital with romance.
"Spark a Romance Revolution in the world with me!"

大塚紗英 4th LIVE
ロマンス至上主義

Credit

大塚紗英(Vo)

増崎孝司(Gt)　則竹裕之(Dr)　下野ヒトシ(Ba)　松本圭司(Key)

Logo Design:ヤマグチリク

Photographer:池田博美

Advertisement Design:伊藤ユキノブ(RICOL)

Production:北川温子、大塚健太郎(808株式会社)

FOH:加藤丈三(株式会社サンフォニックス)

Monitor:新国尚侑(株式会社サンフォニックス)

Musical Instrument Technician:千葉 勇(株式会社サンフォニックス)

照明:小林世維(株式会社 流)

Hair&Make-up:翁 咏健

Pamphlet Design:林健太郎デザイン事務所

Producer:山本悠太(kibatsu inc.)



Great Romance Records

SAE OTSUKA

ROMANCE SUPREMACY

The theme of the live event is "Romance Revolution." Romance is the meaning of her life.
She'll stand up against the current music industry and the huge capital with romance.
"Spark a Romance Revolution in the world with me!"